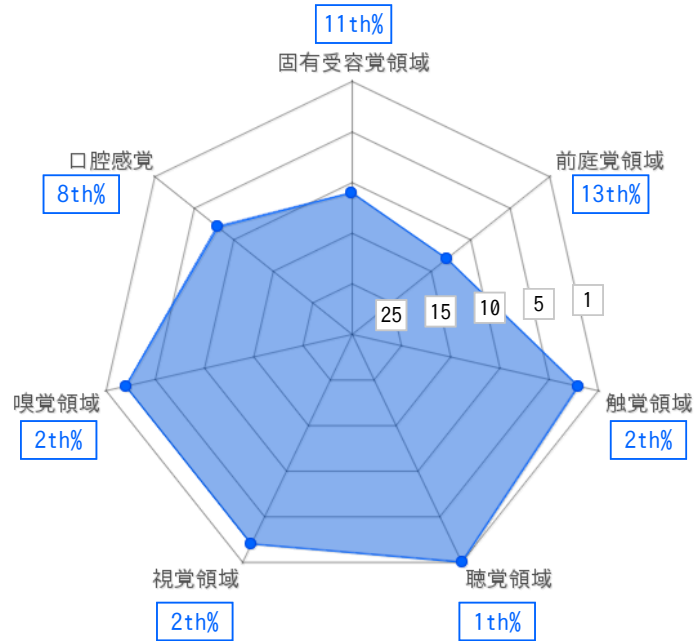


感覚系ごとのスコア

ヘイセイ 殿

実施年月日：2019年04月09日

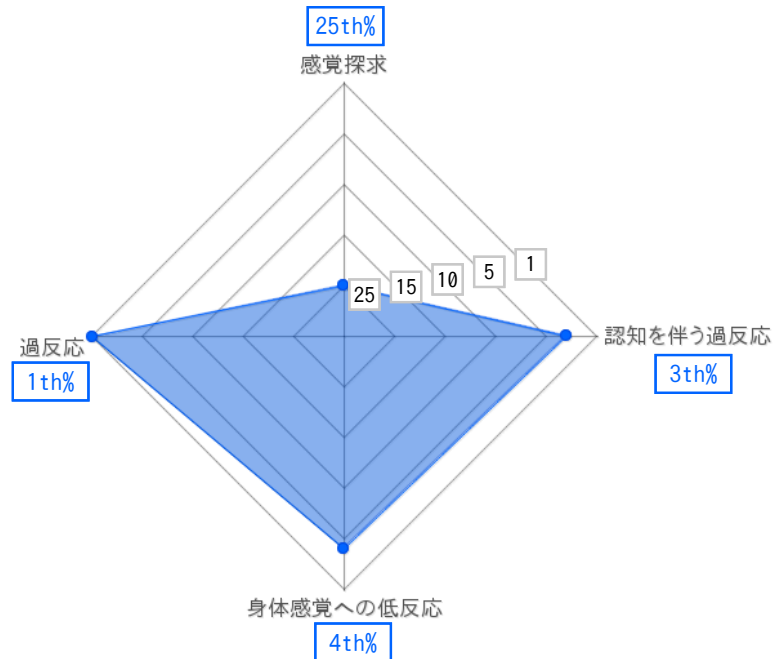


固有受容覚領域	固有受容覚領域に対する反応に偏りがあるようです。筋肉の感覚、深部感覚、身体の動きの感覚刺激の提供の仕方に工夫が必要となるでしょう。
前庭覚領域	前庭刺激(揺れや姿勢変換)に対する反応に偏りがあるようです。スピード、動きなどの感覚刺激の認識に違いがあるかもしれません。
触覚領域	触覚刺激に対する反応に偏りがあるようです。人や物からの触覚刺激に対する反応に違いがあるようです。
聴覚領域	聴覚刺激に対する反応に偏りがあるようです。呼びかけや周囲の音刺激への配慮が必要となるでしょう。
視覚領域	視覚刺激に対する反応に偏りがあるようです。周囲の視覚刺激への配慮が必要となるでしょう。
嗅覚領域	嗅覚刺激に対する反応に偏りがあるようです。臭い刺激への対応の仕方についての対策を検討する必要があります。
口腔感覚	口腔刺激に対する反応に偏りがあるようです。味覚、嗅覚、食べ物の触感などの偏りへの配慮が必要です。偏食がある場合にはこだわりが影響することもありますので、感覚とは別の視点からも分析を加える必要があるでしょう。

感覚刺激への反応パターンごとのスコア

ヘイセイ 殿

実施年月日：2019年04月09日



過反応

感覚刺激に対する過剰な反応は同年齢の子どもと比較して目立たないようですが、下記の点にご注意ください。

集会を嫌がることは、話を長時間集中して聞くことが苦手なためかもしれませんが、騒々しい場所や音が響くところが嫌であることが理由となっていることもあります。利用者と何が嫌なのかアセスメントすることが必要でしょう。聴覚過敏反応が顕著である場合、集会への参加時間を短くしたり、途中で抜けることができるように並ぶ位置を工夫したりすることも対策となるでしょう。

特定の人の声が嫌な場合は、その人との距離を取らせることを検討したり、一緒に活動する人の組み合わせを検討する必要があるでしょう。


急になる音や大きな音に不快反応を示しているようです。不快に感じる音を少なくしたり、排除したりすることの検討が必要となるでしょう。例えば、運動会のスターターピストルを旗に変えるなどの対策が考えられます。耳栓が有効なことがあります。騒音全部をシャットアウトするものと騒音はシャットアウトするものの人の声は聞こえるものがありますので、どれが良いか試してみる必要があるでしょう。イヤーマフ(写真S-1)やノイズキャンセリングヘッドフォン(写真S-2)、デジタル耳栓(写真S-3)を使うと嫌な音を防ぐことができますので、その使用を検討すると良いでしょう。ノイズキャンセリングヘッドフォンやデジタル耳栓は、騒音には効果的でエアコンの音や車の走行中の音は軽減できますが、人の声や急に鳴る音はシャットアウトできませんので、不快な音の種類によっては効果がないことがあります。



写真S-1



写真S-2

過反応	 <p>写真S-3</p> <p>親御さんに自宅で食べられないもの、保育園などで食べられなかったものなどを確認する必要があります。以前食べられていたけども食べられなくなったもの、以前は食べられなかったけれども食べられるようになったものがあれば、その内容、きっかけなどを確認する必要があります。そのような情報を得ることで支援方策が見つかることがあります。感覚の問題がある子どもの場合、味やにおいの感じ方が違ったり、受け入れられなかったりすることがあります。そのため、偏食指導は慎重にする必要があります。偏食指導において、無理を強いる対応をすると学校自体に対して嫌悪感が出ることもありますので、慎重にする必要があります。</p> <p>揺れる刺激に対する不安や恐怖があるようです。揺れに酔いやすい場合は無理してはいけません。そうでない場合は、スモールステップで刺激を体験すると揺れが大丈夫になることがあります。</p>
身体感覚への低反応	<p>同じ年齢の子どもと比較して、身体感覚への気付きにくさや反応の弱さは行動は目立たないようです。</p>
感覚探求	<p>同じ年齢の子どもと比較して、感覚刺激を過剰に求める行動は目立たないようですが、下記の点にご注意ください。</p> <p>雑音、学習と関係がない聴覚刺激に注意をそらされるようです。必要な聴覚情報のみに注意を向けて他の刺激をシャットアウトするというのが難しいようです。そのため、不要な刺激が入らないような工夫が必要となるでしょう。個別学習の場面では、机のまわりにパーテーションを立てて周囲からの刺激が入らないようにすると集中しやすくなることがあります。</p> <p>呼びかけに対する反応が弱い様子で、対人的な注意が向きにくい可能性があります。子どもと遊びなどの関りを通して、相手に注意が向くように支援していく必要があります。</p> <p>他の人から接触されることに過敏反応が起こりやすいようです。後ろから急に触ったりしないように気をつける必要があります。</p>